

(十七) 山羊は酒を飲むか？ 飲んだら酔うか？

亭主がある年、果実酒に凝（こ）った。庭のブルーベリーとまたたび、拾ってきた花梨（かりん）、買ってきた梅の4種類を焼酎に漬け、その瓶を棚に並べてまずは数カ月見て楽しみ、次に飲んで楽しんだ。

一番旨いのは評判通り花梨、次にまたたび、それから定番の梅、しかしブルーベリーは少し甘過ぎる、という。

またたびは亭主がホームセンターで苗を買ってきて金網沿いに植えたものである。女房はまたたびなる植物が、普通の直立する木だと思っていたが、実際はつる性であった。こんなものを売っていたら見逃さずに買ってきて植えるところが、この亭主のもの好きなところである。

またたびの実には梅の半分くらいの大きさでまん丸。かなりの数の実がつるにつき、酒に漬けるには充分であった。

猫にまたたび、と言う。

猫の餌や爪とぎ用の板を買うと、時々「マタタビ粉」という小袋が一緒についている。

一度、試してみた。

居間の爪とぎ用の板にマタタビ粉末をふりかけ、猫を連れてくる。

猫は臭いを嗅（か）ぎ、しばらくすると今まで聞いたことのない声を出して鳴き始めた。ニャオーン、ニャオウウ、と鳴いては、床に背中をつけて寝そべり、空をひっかくように両手両足を動かし、体をよじる。

またニャオ〜ンと長く声を伸ばして鳴き、体をくねらせる様子は実に色っぽく、亭主と女房はその奇態に手を打って笑いころげた。

あの、「猫がまたたびで酔う」というのは本当なのだ。

だから亭主がまたたび酒を漬けこんだ時、女房は亭主がまたたび酒を飲んだら、同じように奇声を発して体をくねらせるのか、と興味津々（しんしん）であったが、さすがにそれはおこらなかつた。猫ではない亭主は淡々とまたたび酒を飲み、ご満

悦であった。

あんまり果実酒が美味だったもので、亭主は2匹目の泥鰻（どじょう）を狙い、残ったまたたびにもう一度焼酎を足した。が、当然のことながら、エキスが染み出てしまったカスを漬けても旨い酒にはならない。

「これどうするの？」

「まずい。捨てる」

「もったいなくない？」

「でも旨くないよ。俺は飲まない」

「じゃ山羊にやってみる？」

「は？」

山羊はクズ野菜から果物の皮、果ては消費期限切れの菓子まで、飼い主や隣人が「おやつ」にくれるものなら、喜んで食べる。

が、果実酒はかなりアルコール臭がする。

はたして山羊が酒を飲むだろうか？

夫婦は山羊の餌皿に、一度漬けた後のまたたびカスの混じった焼酎を入れた。

山羊は臭いを嗅いだが気にならなかったようで、まずアルコールの染みたまたたびを次から次へと器用に歯でつまんで食べた。またたびがなくなると唇をすぼませて酒を飲み、最後は隅々まで皿を舐めまわした。美味だったとみえる。

そういえば、自然界でも時々果実が熟し過ぎると自然に発酵することがあるそう。動物はそれを食べたり飲んだりするらしく、猿酒というのを聞いたこともあるから、山羊酒もあるのかもしれない。

いや、まさか。

亭主と女房が感心して眺めていると、10分後、なんだか山羊の目つきがトロンとしている。鼻から口のあたりがふだんより赤い。鼻の穴も膨らんでいる。

「見て見て、あれ、酔っぱらってるんだよ！」

亭主と女房は笑いころげた。

「すんごくマヌケな顔！」

「あんな顔ふだん見たことない！」

「山羊も酒を飲むし、飲んだら酔っぱらうんだねえ」

「酔っぱらったヤギのこの幸せそうなマヌケ面は、酔っ払った時のお父さんと一緒！」

「それはお義父さんに失礼じゃないか？」

「でも事実じゃん!？」

「……フッフッフ」

